

御代田・喜びの集い

2007. 5. 27 (日)
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

使徒の働き 2章1節から4節

五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。

使徒の働き 2章11節

「ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。」

使徒の働き 2章22節から24節

「イスラエルの人たち。このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです。これは、あなたがた自身をご承知のことです。あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」

使徒の働き 2章32節から33節

「神はこのイエスをよみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです。」

使徒の働き 2章36節から38節

「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいのでしょうか。」と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

使徒パウロは、イエス様に会って、主の御救いに与（あずか）るようになったエペソの兄弟姉妹たちに、次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 4章30節前半

神の聖霊を悲しませてはいけません。

「神の聖霊を悲しませてはいけません」と。（その可能性があるからです。）

祝福されたいと思うなら、聖霊を悲しませてはいけません。祝福されなくてもいいと思うなら、もちろん聖霊を悲しませてもいいということになるでしょう。実を結ばなくてもいいと思うなら、聖霊を悲しませてもいいかもしれませんが、「神の聖霊を悲しませてはいけません」と、みことばは語っています。

今読みました箇所、使徒の働き2章の11節に「神の大きなみわざ」という表現が出てきます。また、22節に「力あるわざ」、また「不思議なわざ」と書かれています。

聖書は本当に素晴らしい神のみことばです。人間は何をすべきか、どのようにならなくてはいけなかつたかというのではなく、大切なことは、主のみわざそのものであり、「主が何をなさつたか」ということです。

人間は、二種類のカレンダーを持っています。

一種類のカレンダーは、人間の習慣と人間の迷信によるものです。日本のカレンダーもだいたいそうなのです。私は新年が始まる前にいつも調べてもらいます。日本のカレンダーをなぜ知りたいかという、「葬儀」のことを考えるからです。「友引」はいつなのかを知っていたほうがよいと思うからです。

もう一種類のカレンダーがあります。それは、人間の習慣や人間の迷信に基づくものではなく、「永遠なる事実」に基づいているカレンダーです。時々、質問されます。「五旬節はいつですか？」と。日本のカレンダーには書いてないのです。つまり大切にされていないからです。「クリスマス」は誰でも知っています。「イースター」は、わからない人も沢山います。

では、「五旬節」とはいったいどういうものなのでしょうか。ドイツでは非常に大切にされています。昨年と今日と明日、アイドリングゲンに若者が沢山集まります。五旬節を祝う大会だからです。聖霊降臨の大切な日だからです。2つのテントが今建てられています。一つのテントには、1,000人入ります。もう一つのテントは、5,000人入るものなのです。毎年5,000人から6,000人の若者が集まるようになります。

聖書の中で、「主のなさつたみわざ」、「なさるみわざ」について書かれています。おもに七つのお祝いです。つまり神の大いなる七つのみわざについて書き記されているのです。最も大切なものの一つが、五旬節ではないでしょうか。

この七つのお祝いは、いったいどういうものなのでしょうか。

1. クリスマス

これは、言うまでもなく「イエス様の御降誕」ということです。けれども、イエス様がこの世に来られたということだけです。イエス様の始まりではありません。私たちの誕生は、私たちの始まりです。しかし、イエス様の場合はそうではなかったのです。イエス様によって万物が造られました。主イエス様は、永遠から永遠まで生きておられるお方です。これは人間にとっては考えられないことです。理解できないことです。けれども、間違いない事実です。

2. 受難節

イエス様は、そのためにお生まれになりました。生きるために生まれたというよりも、死ぬためにイエス様はお生まれになりました。神としては死ぬことができないからです。ですから、イエス様の十字架の死を記念するためのものとしては、「受難節」なのです。

イエス様は裸にされ、十字架に釘づけられました。イエス様のこの世でのご生涯は33年間でしたが、その間イエス様は大工として30歳まで働かれ、残る3年間は福音を宣べ伝えられ、病人を癒し、死人を生き返らせなさいました。けれど、当時の宗教家たちや、聖書学者たちのねたみによって、死刑の宣告を受けるようになられたのです。

イエス様は次のように言われました。まず、「自分が神の子であり、約束された救い主である」ということです。そして、イエス様がこの世に来られたのは、楽な生活をしたり富を蓄えたりするためではなく、「死ぬためである」ということを、はっきり何回も何回も言われたのです。

人類は、「いのちの主なる神」から離れたため、死の罰を受け、永遠の滅びに至らなければならなくなりました。しかし主なる神は人類を愛されたので、彼らが救いに与る機会をお与えになるため、この世に来られたのです。

「全人類の身代わりとして、わたしは死ぬ」と、イエス様は何度も言われたのです。「死ぬ」だけではなく、「十字架の上で死ぬ」と言われたのです。何を言っているのか、とみな思ったに違いありません。信じた人は一人もいなかったからです。イエス様が十字架につけられることは考えられないことでした。けれど、聖書の中心は、「十字架につけられたイエス様」なのです。

3. 復活祭

すなわち、イエス様の復活を記念するお祝いです。

イエス様は、死の状態に長く留まることはなさらず、3日目によみがえられたのです。イエス様の復活は、イエス様が本当に父なる神の御子であるという事実を、最もよく証明するものです。孔子も釈迦も死にましたが、復活しませんでした。ただイエス様だけが、復活なさったのです。なぜならイエス様こそ、「まことの神の御子」であり、「約束された救い主」であられるからです。

またイエス様の復活は、全人類の贖いが実際に有効であり、本当の力を持つことの証明でもあります。

4. 昇天記念日

すなわち、イエス様が弟子たちの目の前で昇天されたことを記念するお祝いです。

この昇天記念日は、復活祭の後40日目に行なわれます。イエス様は復活なさってから40日間弟子たちにご自身を現わされ、ともに交われ、食事をなさり、そして五百何十人の人たち（弟子たち）に、復活の姿をお見せになったのです。そして、弟子たちの見ている前で天に上げられました。

使徒の働き 1章9節から11節

こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなされた。イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。そして、こう言った。「ガラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

5. 五旬節

五旬節は、復活の後50日目に行なわれます。

これは、ただ一度だけ聖霊がこの地上に注がれたときのことを記念するものです。イエス様は、弟子たちに次のようにはっきりと約束してくださいました。

ルカの福音書 24章49節

「さあ、わたしは、わたしの父の約束して下さったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

使徒の働き 1章4節、5節

彼らといっしょにいるとき、イエスは彼らにこう命じられた。「エルサレムを離れないうで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

8節

「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

イエス様の弟子たちは、証人として当時知られている全世界に出て行ったのであり、福音を宣べ伝えたのです。ヨハネを除いてみな殉教の死を遂げました。イエス様のために死ぬことは大きな特権であると彼らは思ったのです。

どうしてこのように変えられたかと言いますと、「復活なさったイエス様に出会い」また、「聖霊の宮になった」からです。五旬節の日に聖霊が注がれました。

使徒の働き2章を読むと、このことについて四つの特徴が書かれています。

第一は、「風が家全体を満たした」ということ。これは聖霊の御臨在を証明するものでした。

第二は、「みなが聖霊を受けた」ということ。そして炎のような分かれた舌が一人一人の上にとどまりました。

第三は、みなが聖霊を受けただけではなく、「聖霊に満たされた」ということ。聖霊が、彼らを支配するようになったのです。

第四は、彼らが聖霊の賜物を受け、今まで聞いたことも習ったこともないような言葉で話したということ。

五旬節もまたただ一度だけのことでした。すなわちイエス様が御降誕なさって、十字架に付けられ、復活なさり、昇天なさったように。

聖霊は、五旬節以来この地上でまことの信者のうちに宿っておられます。ここでは知識の問題が大切なのではなく、それよりもはるかに大きなことが大切であることに注意しなければなりません。

私たちの人生が永遠の滅びに終わるか、それとも永遠のいのちに終わるか、ということこそ、一番大切なことです。主イエス様は、すべての人のために完全な救いを成就してくださいましたが、この救いは、私たち一人一人の体験とならなければなりません。そしてこのことは、ただ聖霊によってのみ実現されるのです。ですから、私たちが聖霊に対していったいどのような態度をとるか、ということが非常に大切な問題です。

サルトルという有名なフランスの哲学者は、自伝を書きました。その中で、彼は次のように言っています。「私の人生は、もうどうすることもできないものとなった」。これは、まことに震撼すべき告白ではないでしょうか。彼は、望みなき人間、喜びなき人間になってしまったのです。どうしてこんなことになってしまったのでしょうか。彼は自ら説明しているのです。「私は、地下室で聖霊をつかまえ、それを追い出した」と。その結果は、「目的なき人生」となったのです。

彼は福音を聞き聖霊の働きを感じましたが、それに対して意識的に心をかたくなにしてしまったのです。そのことによって、彼は最も哀れむべき人間になり下がってしまったのです。それは彼が、「私の人生はもう駄目になってしまった」と言ったその言葉から明らかなのではないでしょうか。

結局、無神論者は、神のご存在については、否定はしていません。しかし、もしそのことを認めるとへりくだらなくてはいけない。悔い改めなくてはいけない。それが嫌ですから、「神はいない。いない。いない」と叫びます。サルトルもそういう男でした。

アメリカの有名な作家であるヘミングウェイは、次のように書いたのです。「我が人生は暗黒の道だ。そして、この道はいったいどこに続いていくのかまったくわからない。かいてもわからない。我が道は終わりのない暗黒の道であり、どこにも行けない道である」と。彼の最後は自殺でした。

私たちの人生が目的のないものにならないように、また暗黒の道を辿ることのないように聖霊が遣わされたのです。「聖霊」は、単に神の影響とか、神の力とか、感情、ではあり

ません。「人格」そのものです。聖霊は、父なる神、また主イエス様と同じように、「神」そのものです。

聖霊には、次のような名前が使われています。「真理の御霊」、「恵みの御霊」、「いのちの御霊」、「約束の御霊」、「力の御霊」、「愛の御霊」、「節制の御霊」、「きよめの御霊」、「知恵の御霊」、「啓示の御霊」、「栄光の御霊」、「信仰の御霊」、「主の霊」などです。

聖霊は、まだ救われていない人たちに対してどのような働きをなさるのでしょうか。
ヨハネの福音書 16章8節

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」

「その方」とは、「聖霊」です。

*まず、「聖霊が、罪について目を開かせる」ということを、みことばから考えてみたいと思います。

人間は誰でも、聖書によると罪人です。どうして多くの日本人は、罪がまったくわからないのでしょうか。先日ニュースを見たとき、あ、そのためかなと思ったのです。裁判になると、必ず「罪」という言葉が出てきます。裁判官は必ず「罪」という言葉を使います。そうすると、「罪」とは犯罪人になること。悪いことをすることなのではないでしょうか。

以前、90何歳かのおばあさんにイエス様のことを話そうと思ったのですが、なかなかうまく伝わりませんでした。おばあさんは、「私は罪人ではない。罪人ではない」と言い続けたのです。「おばあさん、わがママが「罪」なのですって!」。するとおばあさんは、「ああ、そうか! 私もわがママです」と正直に言ったのです。

主のご判断は、「義人はいない。ひとりもない。善を行なう人はいない。ひとりもない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった」。これはすべてを知りたもう主のご判断です。このような罪人は、聖霊の働きによって、自分の本当の姿、すなわち、罪にまみれた姿を認める以外には、決して何の望みもどのような救いもありません。自分が本当に逃れ道のない者であることを知った者だけが、「救いを与えるお方」を呼び求めるのです。

*第二に、「義について目を開かせる」のも、もちろん「聖霊」です。すなわち、「イエス様によって救いが提供されている」という、この事実には他なりません。イエス様はこのように私たちを、「義」とお認めになられるのです。

コリント人への手紙・第一 1章30節後半

キリストは、私たちにとって、…義と聖めと、贖いとになりました。

「キリストは、私たちにとって、義とされました」。この主イエス様を信頼し受け入れる者は、「義」とされます。良しとされます。聖なる主の前に「義とされる」のは、決して

人間の行ないや努力によるのではなく、ただイエス様を信じることによるのです。

そして、聖霊の働きなしに誰も悔い改めることはできないし、信じることもできません。

*第三に、「裁きについて目が開かれる」のも、聖霊の働きによるのです。

イエス様を個人的に、また意識的に受け入れない者は、だれでも裁きを受け、愛の泉、いのちの泉であられる主から永遠に離れた状態に留まらなければならないのです。

人間は、もちろんみな「罪人」です。そして、「罪人」として永遠の死に服さなければなりません。しかし、イエス様は身代わりに死んでくださり、聖なる、主なる神の罰をお受けになってくださったのです。だれでもイエス様に信頼を置くならば、恵みによって良しとされ、義とされます。この素晴らしい贈り物を拒み、自分勝手な道を行く者には望みがなく、救いがありません。

この真理を明らかにするため、聖霊は一生懸命働いておられます。この真理を素直に肯定する者には、本当の「悔い改め」と「罪の認識」があるのです。罪を告白し、罪から離れる者は、イエス様を信じるようになるのです。

聖書を読むと、悔い改めてイエス様を受け入れる者は、賜物として聖霊を受けることがわかります。このように聖霊を受けることは、「新しく生まれ変わること」を意味します。
ヨハネの福音書 3章3節後半

「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

5節後半

「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。」

聖霊の働きなしには、だれも救われないということです。

テトス書に同じ事実について書かれています。

テトスへの手紙 3章5節

**神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、
聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。**

私たちはどうして信じるようになったのでしょうか。どうして救われたのでしょうか。それは、聖霊の働きによるのです。

コリント人への手紙・第二 5章17節前半

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。

「そこには新しい創造がある」と。

聖霊がなければ、望みもなく、救いもありません。ですから、パウロは書きました。

ローマ人への手紙 8章9節

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは

肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

ドイツで、主に大いに祝福されたヘンフィーバ（？）という人がいました。主の恵み、また人間の罪にまみれた状態、改心の必要性について、何十年間も話したのです。それを聞いたある人たちは、喜んで受け入れて救われました。けれど、別のある人たちは、そのような話よりも、「盗んではならない」、「殺してはならない」というようなことについて、いわゆる「道徳」について話してほしいと頼みました。

これに対して彼は答えました。庭にある梨の木をひいて、わかり易く言いました。すなわち、「ある人が良い梨の実を作ろうと思って、毎日梨の木に向かって、『良い梨を作れ、良い梨を作れ』と命令しても何にも実りませんでした。その木を切って、良い梨の実を実らせる木を接ぎ木すれば、良い梨の実を収穫することができます。これと同じように、私たち人間は、聖霊の働きなしに新しく生まれ変わることも良い実を結ぶこともできません」と言ったそうです。

次に、御霊は、信じる者、イエス様の恵みによって救われた人々に対して、どのような働きを与えるかということについて、一緒に考えてみたいと思います。

なぜなら聖霊は、未信者に対してだけではなく、信じる者に対しても働こうと臨んでおられるからです。すなわち御霊の賜物が大切なのではなく、「御霊の満たし」こそが大切なのです。

五旬節に聖霊を受けた者は、すべて聖霊によって満たされたとあります。しかし、聖霊の満たしは過ぎ行くものであり、その後も彼らは何回も何回も聖霊に満たされたと聖書は語っています。

御霊の賜物は一回限りのものであり、決して失われないものですが、御霊の満たしは失われるものですから、何回も何回も満たされる必要があります。

エペソの信者たちは、聖霊の賜物を持ってはいました。それにもかかわらず、パウロは彼らに、「御霊に満たされなさい」。或いは、「神の聖霊を悲しませてはいけない」と書いたのです。

「御霊の賜物」と、「御霊の満たし」の違いを、聖書に基いて読みとってみましょう。

- ・ 第一に、御霊の賜物と新しい生まれ変わりは、一回限りのものでいつまでも続きますが、御霊の満たしは、まったき献身の結果として与えられるものですから、失われる性質を持っています。
- ・ 二番目、御霊の賜物によって人は新しく生まれ変わり、新しく造られた者となりますが、御霊の満たしは、古き人が死に渡されることによってなされるのです。
- ・ 三番目、御霊の賜物によって本当の信者は生まれ、御霊の満たしによって信者はイエス様に似た者とされるのです。

- ・四番目、御霊の賜物によって主なる神に対する戦いが終わり、御霊の満たしによって悪魔に対する戦いが始まるのです。
- ・五番目、御霊の賜物によって主との平和が与えられ、御霊の満たしによって主なる神ご自身の平和を与えられます。
- ・六番目、御霊の賜物は、罪に対する罰を無にし、御霊の満たしは罪を犯すことから守ってくれます。
- ・七番目、私たちは、罪にまみれた生活を主に明け渡すことによって御霊の賜物を受け、まったき献身によって御霊の満たしを受けるのです。

イエスを信じることによって、御霊の賜物を受ける人は大勢いますが、御霊の満たしを受ける人は少ないのではないのでしょうか。満たされることは主がご支配されることです。イエス様を受け入れた人は大勢いますが、イエス様とともに歩む人は少ないのではないのでしょうか。ですから、パウロは次のように書いたのです。

コロサイ人への手紙 2章6節

あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。

受け入れたからもう OK、なのではありません。受け入れたから、「彼にあって歩みなさい」と。つまり、光に來ることだけが大切なのではなく、「光のうちに歩むこと」こそ、信じる者にとって大切です。

ヨハネの手紙・第一 1章7節前半

…神が光の中におられるように、私たちが光の中を歩んでいるなら…

「歩むべき」です。また、イエス様のみもとに來るだけでなく、「イエス様にとどまり」、「イエス様にあって歩む」ことが、大切なのです。

ヨハネの手紙・第一 2章6節

神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

新しいのちを持つだけでなく、新しいのちにあって歩むことが必要です。

信仰を持ってイエス様に近づくことだけでなく、毎日の信仰生活において、見えるところによってではなく、「信仰によって歩む」ことが大切です。

御霊の賜物を持つだけでなく、「御霊にあって歩む」ことが大切です。

パウロは、当時の兄弟姉妹に一文章書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 5章16節前半

御霊によって歩みなさい。

召しを受けることだけでなく、「召しにふさわしく歩む」ことが必要です。イエス様の愛を体験的に知るだけでなく、「愛のうちに歩む」ことが大切です。

そこで、「いったい自分はどうかだろうか」と真剣に吟味すべきなのではないでしょうか。

- ・私たちは御霊によって導かれているのでしょうか。
- ・御霊は私たちの考えや行ないの上に臨んで、働いておられるのでしょうか。
- ・聖霊よりも、人間の方が私たちに影響を及ぼしているのでしょうか。
- ・イエス様の愛こそ、私たちにとって第一のものなのでしょうか。それとも他に別の目的もあるのでしょうか。

また一例をあげてみましょう。ここに一本の銅の針金があります。これを見た大部分の人たちは言うでしょう。「普通の針金ではないか」と。詳しいことを知っている人は、高圧電流の針金だと言います。普通の針金と高圧電流の針金とは違います。それとまったく同じように、私たち信じる者も普通の針金にすぎないか、それとも大きな力を運ぶものかのどちらでしょうか。

また、ここに一枚の紙があります。ある人は普通の紙だと言います。銀行員は何千万円もの価値を持った小切手であると言うかもしれません。私たちもこれと同じように、御霊が私たちを自由に用いることができるか否かによって、普通の紙切れであったり、莫大な価値を持つ小切手であったりするのです。

コリントにいる兄弟姉妹は、確かにイエス様を信じ救われたのですが、なかなか成長しなかったのです。それはパウロの悩みの種でした。

コリント人への手紙・第一 6章19節、20節

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

以上のことから五旬節について、私たちが聖霊に対していかなる態度をとるかが非常に大切なことであるということがわかります。

6. イエス様の再臨

すなわち、イエス様が再び来られることです。

イエス様が再臨なさることによって成就されることは、いかなる政治家が努力しても実現できなかったこの「地上での義」と「平和」が、もたらされるということです。けれども、このイエス様の公の再臨の前に教会の携挙、空中再臨があります。このときイエス様のまことの姿を見ることが出来るため、イエス様の再臨は信じる者にとって本当に心からお祝いすべきことです。

イエス様を見ることは最高の光栄です。聖書は私たちがイエス様に似た者となる、と記しています。その瞬間を、毎日私たちはこのお祝いを、待ち望みたいものです。なぜなら、これこそ私たちの生ける望みであるからです。

7. 小羊なる主イエス様の婚宴

最も偉大なるものです。

ヨハネの黙示録 19章9節前半

「小羊の婚宴に招かれた者は幸いです…。」

「小羊の婚宴」とは、私たち信じる者が主イエス様と完全に永遠に一つになることです。これこそ想像を絶する出来事です。

パウロは書いたのです。

コリント人への手紙・第一 2章9節

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」

大切なことは、「主のなされたみわざ、また今からも主のなさるみわざ」です。
目に見える現実を見ないで、信仰によって歩みましょう。

了